医薬品情報学会がフォーラム開く

一般名処方『能動調剤の幕開け』

GE薬は安全性等の情報充実を

ジェネリック医薬品の活用機運が高まっているが、日本医薬品情報学会は17日に都内で第3回フォーラム「医薬品情報提供のあり方からジェネリックを考えるPart II―患者さんが薬を選択する時代に必要な医薬品情報とは?」を開催した。この中では「一般名処方は薬剤師にとって、受動的調剤から能動的調剤への幕開け」とする見方が示されたものの、一方でジェネリック医薬品(GE薬)は安全性等の情報が先発メーカーに比べて劣るとの課題も指摘された。

当日はメーカー、薬局薬剤師、医師、患者寄りの立場の人らが集まり、GE薬の現状認識と将来の期待が話し合われ、GE薬の品質、メーカーからの情報提供体制、消費者に対する医療側の情報提供などについて問題点が挙げられた。

帝京大学脳神経外科の藤巻高光氏は、GE薬を使っている立場から、緊急を要する情報提供では、先発メーカーに比べかなり劣る印象を持っているとした。同氏は、妊婦へ抗けいれん薬を投与する際、後発メーカーに情報提供を求めた時のケースを例に挙げ、「使用していたのはGE薬だが、問い合わせに対して後発メーカーからは、いつまで待っても返事がなく、何度も催促した。先発メーカーへも問い合わせたら、一般的な薬剤情報以外の蓄積された情報が、1時間程度で送られてきた」との経験を紹介した。

GE薬は安全性等の情報が先発メーカーに比べて劣るとの指摘も

しかし薬効については、「あまり不安に思っていない」とした。「患者によって適性が異なり、先発とか後発とか比較のしようもない」ことが理由という。ただ「長く使っている薬を変えることが、その患者へ不利に働く場合もあり、その点は注意が必要」と指摘した。

さらにGE薬メーカーの多くが小規模の企業であることを踏まえ、「(主体は)民間でも国でも構わないが、医療側が扱いやすい形で情報を提供してほしい」と訴えた。これに関し沢井製薬医薬情報部の戸谷治雅氏は、情報提供体制は企業によって様々だとし、「情報が得られない場合は、回答を求め続けていただきたい。そうしてGE薬メーカーを育ててほしい」と述べた。

また、一般名の処方せんを応需している立場から、川崎市薬剤師会の山村慎一氏は、「GE薬は玉石混交」とした上で、GE薬の選定基準について「現在のところ胸を張って言える段階ではない。一番は流通、次に品質情報が提供されるかがポイント。溶出試験の結果などはメーカー自身によるものであり、第三者の評価を進めるべきではないか」と語り、安定供給が最大の採用ポイントになっている現状を紹介した。

一般名処方を受けて、GE薬を患者に勧める場合の流れについては、「まず一般名処方、続いて対応する先発品と後発品があること、品質は概ね同等であることをグラフなどを用いて説明。次に値段の比較を紹介して選定する」とした。会場から、添加剤の違いによる影響といった情報は提供していないのかとの質問が出されたのに対しては、「比較検討するための情報も不十分であり、現状ではそこまでの対応はできておらず、不安は感じている。ただ、患者側は値段を気にしているようだ」と応じた。

一方、ユーザーの視点として日本ジェネリック研究会事務局長の細川修平氏が同研究会の活動状況など紹介した。細川氏は多くのメーカーから情報提供を受けて、GE薬を導入する際の一助として、採用時に必要とされる情報を収集し、Web上で検索できるシステム「ジェネリック医薬品情報システム(GIS)」を立ち上げ、同研究会正会員の医療関係者に限定して公開しているという。今後はどの医療機関でGE薬を扱い、一般名処方を行っているかなどの情報提供も進めていきたいと方向性を語った。